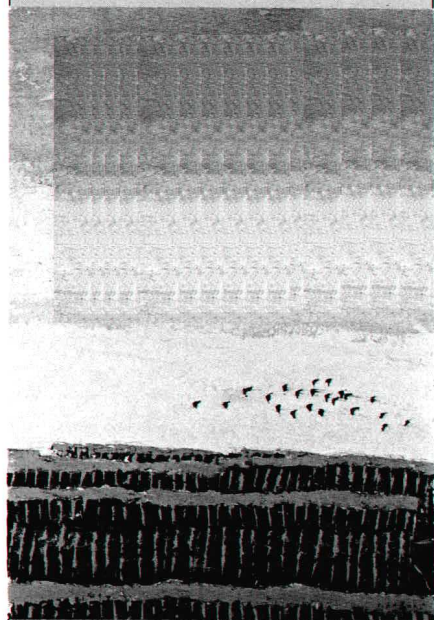


国心意気物語

花の十郎太

柴田 錬三郎



集英社

花の十郎太

戦国心意気物語

一九七二年八月二十五日 初版印刷

一九七二年八月三十日 初版発行

● 定価 五九〇円

著者 柴田錬三郎

装画 香月泰男

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二の五の十

郵便番号 一〇一

電話 東京(265) 六一一

振替 東京 一五六五三

印刷・製本 図書印刷株式会社

著者との了解により

校印を廃止します。

乱丁・落丁本はお取替えします。

目

次

美女をもとめて	九
宿縁	一五
湖賊	二二
別れの門	二八
夢	三四
落城	四〇
人と人と	四六
悪僧兵	五三
男子の泪	五九
能面	六五
軍用金	七一
夢をこわさず	七七

戦国心中 八三

八荒竜鬼隊 六九

放浪問答 五五

陣場女郎 二〇一

奇襲陣 二〇七

再会 二二三

死地命令 二一九

多芸御所最期 二二五

明智光秀 二三一

花ひらく美女 二三七

伊賀の上忍 二四三

信長残忍 二四九

於風 一五

決闘廓 一六

その宵 一六

花の宴 一七

檜の舞 一八

酒乱天狗 一七

遊女歌舞伎 一八

鼻づくし 一九

未来の道 二〇

恋狂い 二三

好餌 三八

絶望の夜 三四

猿丸報告	二三〇
槍試合	二三六
時は今	二四三
敵は本能寺	二四九
火焰の中	二五四
天下の形勢	二六〇
槍手柄	二六六
雪	二七三
恋文	二七九
月見砦	二八四
死の酒宴	二九〇
女郎争い	二九六

十六夜月の下で 三〇三

人それぞれ 三〇八

生死の間 三〇四

血路 三〇〇

慟哭 三〇六

流れる歲月 三〇三

落人再会 三〇九

啼け、ほととぎす 三〇五

散る花のように 三〇二

花の十郎太

戦国心意気物語

美女をもとめて

一

近江の山野が、暮れようとしていた。

春もたけなわの、野にも山にも、花が咲きみだれている季節であったが、城取り国取りにあけくれている戦乱の時代なので、花の美しさなど賞でる余裕など、人間にはなかった。

小さな盆地に裾をひいた丘陵の斜面にも、山桜が咲きはこつていたが、それに、視線を向けた者が、幾人いたろう。

もう十日以上も、ここは、鯨波^{くまづな}がどよめき、刀槍がひらめき、馬がはね、旗がひるがえる戦場であった。

寄手は一万五千余、盆地をへだてて、丘陵と対面する山岳の小城にたてこもったのは、その三分の一にも満たぬ人数であったが、山險に拠つて、凄じい抵抗をしめたのであった。

しかし――。

日が経つにつれて、山城の士卒の頭数は、みるみる減つてゆき、寄手の計算では、もう三百人も残っていないようであった。

勇敢不屈の士卒は、ことごとく、討死した、とみてよかつた。

寄手にのこされているのは、一気に総攻撃をしかけて、山城を焼きはらう――それだけであった。

丘陵そして盆地の彼方此方にちらばる寄手の陣地では、明日の総攻撃をひかえて、今宵は、さかんな酒宴がひらかれることになろう。

いや、もう、どの陣地からであろう、はやばやと野放図な歌声が、ひびいていた。

「ふうん、やり居るわい」

その歌声をきいて、かぶりを振った一人の男が、丘陵の斜面を、すたすたとのぼって行く。

侍烏帽子をかぶり、革包みの腹巻をつけ、膝がしらまでの四幅袴をはいた雑兵であった。

刀は持つていなかった。

目が細く、左右にはなれていて、どこことなく愛敬がある、憎めない風貌である。

身ごなしは、軽い。

平地を小走りに往くような速さで、たちまち、頂上に達した。

「やはり、若は、ここでござったか」

頂上には、樹齡數百年とおぼしい山桜が、一本だけ、空
いっばいに、花の枝をひろげていた。

その根かたに腰を据えている人影に、雑兵は、声をかけ
た。

朱の胴丸をつけた具足姿は、まことに遅しかったが、そ
れよりも、人をおどろかせるのは、その顔の中央に突出し
た鼻であつた。

中国の絵に、嶮を負うて、うそぶく虎のすがたが、よく
描かれているが、その鼻は、いささか誇張すれば、そんな
あんばいに、顔からそびえ立っていた。

眉目も口もとも、秀麗といつていい凛々しさであり、も
し鼻の高さが尋常ならば、たぐいまれな美丈夫であらう。
神の悪戯としかいいようのない巨大な鼻梁なのであつた。
まだ二十歳になつたばかりとみえる若さであつた。

その視線は、まっすぐに、彼方の山城へあてられてい
た。

「秀歌でも一首、ものされましたかな、若——」

雑兵は、たずねた。

巨鼻の若武者は、それにこたえるかわりに、

「猿丸——、あの山城の屋根と、この十郎太の鼻のさき
と、どちらが、あとまで暮れのころか、見くらべて居れ」
と、云つた。

「また、そのようなひねくれた云いかたをなさる」

「云わぬが花、か。はははは……、虎がうそぶけば風さわ
ぎ、竜が吟ずれば雲興り、十郎太がもの云えば、鼻が泣
く——」

「若、申されるな！」

「云わぬは云うにいやまさる、と知りながら、おしこめた
るは苦しかりけり、と源氏物語にもあるぞ。おのれでおの
れの鼻をからかっているのだ。だれに遠慮もいらぬこと
だ」

「したれど、見知らぬ他人は、ひがみとしか受けとり申さ
ぬ」

「見知らぬ他人が、はじめて、この鼻を眺めた時の、あつ
けにとられたさまを、お前も、いやというほど、見せられ
て居るではないか。……おれは、それがやりきれぬので、
むこうが何か云う前に、間髪を入れず、おのれでおのれの
鼻をからかつて、それを挨拶がわりにして居るのだ。あわ
れや、物心ついた頃から、いつの間にやら身につけた道化
の振舞いだ」

二

この二人は、主従の關係にあつた。
飛驒の山中に豪族として四方に名をひびかせた修羅館と

いう旧家があった。若者は、その嫡子として生れた。名を十郎太。

館の忠僕の伴が、猿丸であった。

十郎太は、十五歳になった正月元日、不意に館から姿を消し、三年間、杳として消息を断った。

飄然として、帰って来た十郎太は、別人のように逞しい偉丈夫になり、どこで、身にそなえたか、太刀使い槍使いに無双の業を会得して居り、また、ひとたび口をひらけば、言泉は九流（九種の学派）に会す、という古いことわざそのままに、博識ぶりを發揮した。

帰って来たその年、安堵した父親が、逝くや、十郎太は、

「猿丸、ついて参れ」

と、数百年もつづいた修羅館を、未練気もなく、すてて、流浪の旅に出たのであった。

戦乱の諸国をわたりあるいて二年余――。

十郎太は、いまだ、一命をささげても悔いしないような明君に、出会わぬまま、「合戦買い」の牢人ぐらしをつづけていた。

「合戦買い」というのは――。

どこかで、城の攻防があると、どこからともなく、牢人者たちが、馳せ集って来て、籠城方に、あるいは寄手方に、やとわれて、働く――いわば、後世の、やくざの喧嘩

に、手当をもらって加わる用心棒のような稼業をさしていた。

十郎太と猿丸は、この近江の小さな山城の攻防には、寄手方に、やとわれていた。

朱塗りの胴丸を身につけ、同じく朱塗りの大身の槍をふるって闘う巨鼻の若者の、人間ばなれした強さは、敵も味方も、ただもう舌をまくばかりであった。

山城から撃って出て来た士卒のうち、名のきこえた勇猛の武者十七人を、十郎太一人で、討ちとっていた。しかも――。

山桜の根かたに腰を据えた十郎太の五体は、微傷だに受けてはいなかった。

「猿丸――」

「はい、なんでござる？」

「この合戦買いは、あと味がわるいな」

「勝つときまった寄手側に加わったことでござるかな」

「うむ。城側へやとわれればよかった。その方が、おれの性分に合った」

「これまで、若は、負けいくさと知りつつも、滅びる側に、好んで、やとわれては、一文にもならぬむだ働きをなされたが……損なご気象でござる」

「明日の総攻撃には、おれは、ここから動かぬ」

「そんな……、合戦買いの余得は、落城の際でござるぞ。」

逃げおくれた女子衆の中から美しいのをえらんで、わがものにするとか、軍用金をかすめ奪るとか——」

「そんなことを、おれが、これまで、一度でも、やったか」

「若は、闘うことだけに、生甲斐をおぼえて居られるようじゃが、たまには、美しい女子でも、抱かれませい。なんなら、この猿丸が、えらんで、さし上げましようぞ」

「おれは、惚れた女性でなければ、抱く気がせぬ」

「惚れた女子が、これまで一人でも、居りましたかな？」

「いや、まだ一人も、出会わぬ。……実は、おれは、おのれの生命を捧げても惜しくないほど惚れる女性が、どこかの城にいるかも知れぬ、と思ひながら、合戦買いをして来たようだ。……猿丸、この世には、惚れる女性は、めったに居らぬようだな」

「だから、べつに、惚れずとも……」

「いや、おれは、きつと、身も心もささげて悔いぬ女性に、出会う希望をすてぬぞ。……男も女も、生涯、一度は、燃え狂う恋をする機会を、与えられる、とおれは、信じている。たとえ、この化物鼻を持っていた、でも、恋ができれば、はずはない」

「それは、まア、そういうことでござろうけれど……」

「そうだ！」

不意に、十郎太が、すつくと、起ち上った。

「おれは、やはり、明日は、城へ入るぞ」

「……………」

「あの城の中に、おれのもとめている美女が、いるようだ。たつたいま、そういう気がしたぞ。この靈感は、あたる！」

十郎太は、双眸を光らせて、云った。

猿丸は、彼方に暮れなすむ山城の屋根と、十郎太の鼻を、そつと、見くらべた。

——暮れのこるのは、どうも、わがあるじの鼻のさきのようじゃ。

三

夕月城という美しい名称を持つその山城に対する総攻撃は、夜明け早々に開始され、辰刻（午前八時）すぎには、すでに終了していた。

城内に生き残っていた者三百余のうち、闘うことのできる士卒は、寄手側の予想よりもはるかにすくなく、百二十人にすぎなかったのである。その他は、老幼婦女子であつた。

城門が、うち砕かれた時、すでに、夕月城の城主は、いさぎよく自決して果てた模様であつた。

城主は、七十に近い老人であつた。

城主のあとを追うべく、文字通り決死の覚悟をきめた城兵たちは、阿修羅となって、殺到する雲霞の敵勢へ、斬り込んだ。そして、たちまちに、餓狼の群に包囲されるあわれな小動物のように、一人一人、ばらばらにひきはなされて、刀槍の波状攻撃のうちに、躍りはね、叫びのたうって、たおれていった。

……山城の建物が、すべて、火焰を噴きあげた頃あい。

十郎太は、北隅の出丸に、たたずんでいた。

この朝、十郎太は、城内へ一番乗りしていたが、一人も斬ってはいなかった。

向って来る者の刀や槍を、はらっただけであつた。

城とともに生命をおわろうとする者たちを、斬る気がしなかったからである。

十郎太は、いまだ見ぬ一人の美しい女性をもとめて、その女性を他の者につかませないために、城内へ、まっ先駆けて、突入したのである。

攻防は、終つた。

山城は、焼けて、ほどなく、あとかたもない無人の世界にかえるであらう。

十郎太は、しかし、もとめる美しい女性を、発見してはいなかった。

轟然と首たてて崩れ落ちる櫓を、茫然と眺めやりながら、

——駄目か、おれの靈感など……。
と、自嘲した。

そこへ——。

猿丸が、どこからともなく、駆け寄って来た。

「若——、地下倉を見つけ申したぞ。軍用金が、かくしてあるに相違ござらぬ。……おそらく、そこから、野へ抜ける地下道がつくられて居り申す。はよう、参られい」と、せきたてた。

「おれは、金など欲しゅうはない。金を取るのには、家来のお前の役目だ。勝手に取つて来い」

「美女など、どこにも見当らぬ以上、ここにこうして立つて居られても、むだでござる……。軍用金を頂戴して、地下道から、野へ、さっさと退散するのが、おん身のためでござる」

猿丸から、そう云われて、十郎太も、

——それも、そうだな。

と、あきらめると、あとについて歩き出した。

その地下倉に降りる入口は、足軽小屋と植木のあいだの、巨きな岩かげにあつた。

猿丸は、こういう秘密の入口を発見することにかけては、犬の嗅覚にも似た鋭い直感力をそなえていた。

なだれ込んだ寄手の士卒や合戦買いの牢人どもは、金と女を物色して、血まなこになっていたが、まだ一人も、そ

こを見つけてはいなかった。

十郎太と猿丸は、暗い石段を、降りた。

「お待ち下され。いま、明りを——」

猿丸は、するすると、さきへ進んだが、すぐに、岩壁にとりつけられた燭台をさがしあてて、火打石を鳴らした。

そこから、ぼうつと、赤い燈火が闇にじんでき、地下倉の様子を照らし出した。

長持や櫃が、ところせましと、据えられてあった。

猿丸は、敏捷に動きまわって、それらの蓋をひらいていたが、突然、

「むっ！」

と、叫んで、ひとつの長持の上へ、とびあがった。

物蔭に、人がひそんでいたのである。

すかし視た猿丸は、

「なんだ女子か」

と、云った。

その声に、十郎太は、そこへ、大股に、歩み寄ってみ

た。

「どんな女子だ？」

のぞき込んだ十郎太は、そこにうずくまっているのが、五十年配の婦人であるのをみとめた。

どこかに深傷を受けているらしく、苦しげにあえいでいる。

「猿丸、手当をしてやれ」

十郎太は、命じた。

「こんな婆さんを、でござるか」

「ばか！ お前のお袋が、こうなっているとしたら、どうだ？」

「しかし……」

「はよう手当をしてやらぬか」

「まだ軍用金を見つけて居り申さぬ。もうすぐ、ここへ、どやどやと味方が降りて参ったら、それこそ……」

「ぐずぐず申すな。手当がさきた」

十郎太は、どなった。

その時、うずくまった初老の女は、

「も、もし！ おねがいでございます。……わたくしは、もう、たすからぬ深傷で、ありますゆえ、すてておいて、下され。……そのかわり——」

と、云いながら、身を横にずらした。

女のうしろに、もう一人、ひそんでいる者がいた。

やはり、女であった。しかし、それは、まだ七八歳の少女であった。

「こ、この姫君を、京へ、おつれ下さいますまいか」
必死のまなざしを、十郎太の視線にすがりつかせた。

「……………」

十郎太は、黙って、少女を眺めやった。